

# アーノルド・ローベル研究：「お?紙」の考察を通して

著者	大塚 浩
雑誌名	静岡大学教育学部研究報告. 人文・社会・自然科学 篇
巻	71
ページ	23-33
発行年	2020-12
出版者	静岡大学大学院教育学領域
URL	<a href="http://doi.org/10.14945/00027825">http://doi.org/10.14945/00027825</a>

## アーノルド・ローベル研究

### ——「お手紙」の考察を通して——

A Researching Arnold Robel through Japanese Language  
Teaching Materials “The Letter”

大塚 浩<sup>1</sup>  
Hiroschi OHTSUKA

(令和2年11月30日受理)

**ABSTRACT** Arnold Lobel (1933-1987) was born in Los Angeles, Republic of United States of America. The first recorded example of his work “The Letter” ran in 1970 edition of Publishers by Harper & Row. Later, in 1970, he had his first work, “The Letter” officially published. A fuller, revised version “The Letter” was included. The main issues examined in the research of Arnold Lobel, were the historical backdrop that the story was set against; the differences between the characters in the original version of “The Letter” and those in the school textbook version. The textbook version of “The Letter” was published by Kyouiku Publication and Mitsumura Publication in 1980. It was selected for the first time as a teaching material for students aged 7 years or older and aged 8 years or older. Since 1980, the textbook has been reprinted number of times.

#### I. 何故かえる君は手紙の内容までがま君に伝えたのか

作品「お手紙」において、自分自身ががま君に手紙を書いたことを伏せているかえる君は、がま君との遣り取りの中で、到頭「だって、ぼくがきみに手紙出したんだもの。」と告白してしまう。ここでは、何故かえる君は、「自分自身が手紙を書いた手紙の内容」まで、がま君に伝えたのかについて考察を進めていきたい。作品「お手紙」では、この場面について次のように記されている。1)

「かえるくん、どうしてきみ、ずっとまどの外を見ているの。」

がまくんがたずねました。

「だって、今、ぼく、手紙をまっているんだもの。」

かえるくんが言いました。

「でも来やしないよ。」

がまくんが言いました。

「きっと来るよ。」

かえるくんが言いました。

---

<sup>1</sup> 国語教育系列

「だって、ぼくがきみに手紙出したんだもの。」

「きみが。」

がまくんが言いました。

「手紙に何て書いたの。」

かえるくんが言いました。

稿者は、かえる君が何故「手紙を書いたことをがま君に伝えたのか」について、次のように述べている。2)

かえる君は、当初から悲しい思いのがま君を喜ばせたいと思っていた。一時自宅に帰りがま君への手紙を綴った後、手紙をわざわざかたつむり君に託して届けて貰うよう手配をしたり、がま君との遣り取りの中で、自分自身が手紙を書いたことをずっと秘密にし続けているかえる君の姿から、がま君を喜ばせたいと必死になって心を砕くかえる君の思いの強さを感じ取ることができる。しかしながら、憔悴し「でも来やしないよ。」と力なく発言するがま君の様子は、喜びとはほど遠い状況にある。手紙を書いたことを秘密にすることによって、がま君を驚かせて喜ばせたいと考えていたかえる君であったが、ここにきてがま君の様子を見て、それを秘密にすることが最善策ではないと考えたのあろう。

かえる君が、自分が手紙を出したことをがま君に告白する背景には、二つの判断が存在していると考えられる。すなわち一つは、このままの状態では、がま君の社会的孤立を更に悪化させてしまうという判断である。もう一つは、手紙を出したことを秘密にしたまま、がま君に手紙の到着を待たせようとする自分自身の行動が、却ってがま君を追い詰めてしまっているという判断である。かえる君が自分自身で手紙を出したことをがま君に告白した瞬間は、がま君の悲しみを真に理解し、「がま君の悲しみをかえる君が共有した瞬間」であると言えよう。

かえる君は、ベッドに横たわるがま君に対し、起きて手紙が来るのをもう少し待つことを幾度となく勧めるが、「憔悴し『でも来やしないよ。』と力なく発言するがま君の様子は、喜びとはほど遠い状況」にある。当初は、「手紙を書いたことを秘密にすることによって、がま君を驚かせて喜ばせたいと考えていたかえる君であったが、ここにきてがま君の様子を見て、それを秘密にすることが最善策ではない」と判断し、自分が手紙を出したことをがま君に告白するのである。

では何故かえる君は、「自分自身ががま君に手紙を書いたこと」を告白しただけに止まらず、「自身が書いた手紙の内容」まで、がま君に伝えたのであろうか。

がま君にベッドから起きて手紙が来ることを待つよう促すことが、かえる君の目的であるのであれば、「自分自身ががま君に手紙を書いたこと」を告げれば良いはずである。しかしながらかえる君は、「自分自身ががま君に手紙を書いたこと」を告白しただけでなく、「自身が書いた手紙の内容まで」、がま君に伝えているのである。

がま君が、かえる君に投げ掛けた「きみが。」という発言に着眼したい。この「きみが。」は、「だって、ぼくがきみに手紙を出したんだもの。」と告げるかえる君を、訝しがるがま君の発言であると考えられる。この「きみが。」という発言からは、かえる君の言葉に理解に苦しむ所があり、その理由を探り突き止めようとするがま君の思いを見て取ることができる。

がま君は、そんなことが実際にあったのかというように不思議がりながら、かえる君に「手紙に何て書いたの。」と問うのである。この場面では、がま君から怪訝な目で見つめられるかえる君の姿を垣間見ることができる。かえる君は、がま君の疑心暗鬼を払拭するため、当初予定し

ていなかった手紙の内容まで、がま君に告げる決断を余儀なくされたと考えることができよう。

## Ⅱ. かえる君の手紙とがま君の「ああ。」

### (1) かえる君の手紙

ここでは、かえる君ががま君に認（したた）めた手紙の内容について、考察を進めていきたい。作品「お手紙」では、この場面について次のように記されている。3)

「ぼくはこう書いたんだ。『親あいなるがまがえるくん。ぼくは、きみがぼくの親友であることを、うれしく思っています。きみの親友、かえる。』」

「ああ。」

がまくんが言いました。

「とてもいい手紙だ。」

作間慎一は、かえる君の手紙について、次のように述べている。4)

かえる君は、悲しんでいるがま君に早く手紙を書いて出して、がま君を喜ばせようとしたのである。かえる君が手紙をくれたことがわかったがま君には、その文面がどんなものであれ、いい手紙だしうれいだろう。それは、普段の挨拶ことばのようなものが文面でもよかったのだと思う。それを、あのような手紙を書いてしまうのがおもしろいのである。ただし、がま君は手紙がほしいので、それは手紙の形をとっていることが必要である。かえる君の手紙は、それを十分に満たしている。それで、がま君は「ああ。とてもいい手紙だ。」といったのだとも思われる。「ああ。とてもいい手紙だ。」は、親友でうれしいという言葉がなくても発せられたらう。そうすると、手紙の文面が次のようなものであっても、がま君は「いい手紙だ」と言わないだろうか。

「親愛なるがまがえる君。きょうはとてもいい天気です。きみの親友、かえる」

作間は、かえる君が自分宛に手紙を出してくれたことが分かったがま君にとっては、「その文面がどんなものであれ、いい手紙だしうれいだろう。それは、普段の挨拶ことばのようなものが文面でもよかったのだと思う。」と述べ、がま君は正式な「手紙がほしいので、それは手紙の形をとっていることが必要である。かえる君の手紙は、それを十分に満たしている。それで、がま君は『ああ。とてもいい手紙だ。』といったのだ」と主張している。

ここで作間の主張する、がま君がかえる君の「手紙の文面」よりもかえる君が自分に「手紙をかいてくれたこと」に力点を置いているという考え方には賛同しかねる。

なぜならば、がま君は、かえる君から手紙の内容を聞く前に、「手紙に何て書いたの。」とかえる君に尋ねている点に注目したいからである。このがま君の「手紙に何て書いたの。」というかえる君への問いは、がま君がかえる君の書いた手紙の内容について、当初から強い関心を抱いていたことを証左するものであると考える。

また、がま君が、かえる君から手紙の内容を聞いた直後に、「ああ。」と感嘆し、「とてもいい手紙だ。」と発言している姿からも、がま君がかえる君の手紙の内容に興味を示し、かえる君が自分宛に綴った手紙の文面を高く評価していたと考えることができよう。

### (2) がま君の「ああ。」について

がま君は、かえる君から自分宛の手紙の内容を直接聞き、「ああ。」と、思わず声を漏らしている。ここでは、がま君の発した「ああ。」について、考察を進めていきたい。小林広美は、かえる君から手紙の文面を聞いたがま君の「ああ。」について、次のように述べている。5)

がまくんは、待ちきれなくなったかえるくんから手紙が来ることを聞き驚くが、その内容を聞いて「ああ。」「いい手紙だ。」と感動するところは物語の山場である。そこには手紙をもらうという単純な喜びではなく、自分のことを思ってくれる親友がすぐ近くにいたことを知った喜びがあるからだろう。

ここで小林は、「待ちきれなくなったかえるくんから手紙が来ることを聞き驚くが、その内容を聞いて『ああ。』『いい手紙だ。』と感動する」場面は、「物語の山場」であるとし、ここには「手紙をもらうという単純な喜びではなく、自分のことを思ってくれる親友がすぐ近くにいたことを知った喜びがある」と把握している。

かえる君からの手紙の内容を聞いた直後の反応である「ああ。」には、言葉にならないがま君の感動が集約されていると考える。「ああ。」という短い言葉の中には、驚きや喜びだけでなく、初めて手紙を受け取る者にしか味わうことのできない感動、がま君が想像できなかったかえる君の行動と優しさへの感情などが収斂されているのである。

国語教室において教材「お手紙」を取り扱う小学校第一・第二学年は、学習者である児童が、初めて手紙を受け取るがま君の気持ちを自分自身の体験と重ね合わせて理解することができる発達段階である。それ故に初めて手紙を貰うということに対するがま君の感動について、作品の文章表現を根拠に据えながらじっくりと思考させることにより、「深い学び」を実現することができる。ここに、国語教室で本作品を取り扱う教材的価値を見出すことができよう。

### (3) かえる君による文面の暗唱

宮川健郎は、かえる君自身による手紙の文面の暗唱について、次のように述べている。6)

それは、がまくんが生まれてはじめてもらう手紙なのだ。かえるくんが、彼の手紙の文章を暗唱してみせたから、がまくんはかえるくんが、ほんとうに手紙を書いたのだと思うことができた。

ここで宮川は、「かえるくんが、彼の手紙の文章を暗唱してみせたから、がまくんはかえるくんが、ほんとうに手紙を書いたのだと思うことができた。」と捉えている。手紙の書き手であるかえる君による文面の暗唱は、かえる君が「本当に手紙を書いた」ことの証明であるだけでなく、かえる君からがま君への優しさの籠った音声表現となり、聞き手あるがま君の胸を打つものであったと言えよう。

手紙は、送り手の思いや情報を便箋等に認（した）めたものであり、受け手は文面に綴られた文字言語から送り手の思いや情報を想像・理解するという、優れたコミュニケーション手段の一つである。この場面におけるがま君は、送り手であるかえる君が自分の思いを認めた手紙を、本来の文字言語ではなくかえる君自身の音声言語による手紙全文の暗唱に接し、その一言一句に耳を傾けていたと言えよう。畢竟、がま君の心には、かえる君が認めてくれた手紙本文の文字言語が想起されると共に、かえる君の心の籠った手紙の全文暗唱による音声言語が、奥底まで深く染み透っていたと考えるのである。

またかえる君は、手紙を綴った時から時間が経過しても、がま君宛の手紙の全文をしっかりと記憶している。このことから、かえる君の手紙は、落ち込んで憔悴し切っているがま君のことを懸命に考えた上で、手紙の文章表現を熟考しつつ認めたものであったと推し量ることができよう。つまり、かえる君が認めた手紙は、予期せぬ急なタイミングであっても、その手紙の文面をがま君の前で明晰に暗唱できるほど、がま君への思いを込めた「渾身の手紙」であったと考えられるのである。

### Ⅲ. がま君の幸せとかえる君の幸せ

#### (1) 「かなしい気分」と「とてもしあわせな気持ち」

作品の前半部分において、がま君からの「だれも、ぼくにお手紙なんかくれたことがないんだ。」という告白を受け、がま君とかえる君は「二人とも、かなしい気分で、げんかんの前にこしを下ろしてい」る。その一方で、作品の後半部分では、「二人とも、とてもしあわせな気持ちで」玄関の前に座っている。

作品「お手紙」では、この場面について、次のように記されている。7)

「とてもいい手紙だ。」

それから、二人はげんかんに出て、手紙の来るのをまっています。

二人とも、とてもしあわせな気持ちで、そこにすわっていました。

長いことまっています。

高島晴美は、玄関前に座って待つがま君とかえる君について、次のように述べている。8)

「かなしい」に対する言葉は「うれしい」であるが、うれしさを乗り越しての「しあわせ」である。しかも、「とてもしあわせ」である。そこには、気持ちの安定が感じられる。「気分」ではやや不安定な状態であるが、「気持ち」は安定した状態であり、ここにも安定感が表れている。しかし、ふたりのしあわせは、少し違っている。がまくんは、手紙をもらえるしあわせであり、かえるくんのしあわせは、自分が書いた手紙ががまくんを喜ばせることによるものである。この微妙な違いをたしかめることにより、「親友は、悲しい時もうれしい時も一緒である」という、主題に迫ることができよう。

高島は、『かなしい』に対する言葉は『うれしい』であるが、うれしさを乗り越しての『しあわせ』である。しかも、『とてもしあわせ』である。そこには、気持ちの安定が感じられる。」とし、「気分」と「気持ち」の言語表現の違いから安定感の違いを指摘している。

ここで、作品の前半部分と後半部分について、原作テキストである『Frog and Toad Are Friends』を見てみたい。原作テキストの前半部分は、「Frog and Toad sat on the porch, feeling sad together.」であり、後半部分は、「They sat there, feeling happy together.」である。この場面における二人の心情の表現方法に着目したい。前半部分では「feeling sad together.」と表記し、後半部分では「feeling happy together.」と表記して、両者とも同じ「feel」という動詞が使用されている。

その一方で日本語訳では、前半部分を「かなしい気分」、後半部分を「しあわせな気持ち」と訳し分けている。訳者である三木卓の見識により、前半部分と後半部分における「二人」の心情の対比を、より一層際立たせていると言えよう。「気分」と「気持ち」の言語表現の違いは、安定感の違いというよりは、前半部分と後半部分における二人の心情の対比を強調したものであると考えられる。

#### (2) がま君の願いとかえる君の手紙の基底

井上幸子は、手紙の内容と関連付けてがま君の心理について、次のように述べている。9)

また my best friend と Your best friend の訳語が、「ぼくのしんゆう」「きみのしんゆう」となっているが、かえるくんの手紙に書かれているこれらの共感性のあることこそ、がまくんの願い望んでいた事柄であり、かえるくんの的確な洞察力に感服する内容である。(中略) 英文の make は多義語であるが、この状況で使用される make は、感動を呼び、素晴らしい言葉を導きだす動詞と解釈できる。(中略) 形容詞 good

も多義語で、「りっぱな、親切的な、思いやりのある、尊い…」などの意味があり、that makes a

very good letter は、がまくんのいろいろな思いが込められている表現である。

ここで井上は、「my best friend と Your best friend の訳語が、『ぼくのしんゆう』『きみのしんゆう』となっている」点を指摘した上で、「かえるくんの手紙に書かれているこれらの共感性のあることばこそ、がまくんの願い望んでいた事柄であり、かえるくんの的確な洞察力に感服する内容」であると言及している。

確かに、がま君の「願い望んでいた事柄」とは、かえる君からの「you are my best friend」(君がぼくの親友であること)という言葉であり、「Your best friend, Frog.」(きみの親友、かえる。)という言葉であろう。かえる君の「的確な洞察力」の根底にあるものは、がま君に対する自省の念であると考ええる。作品の前半部分において、がま君から「だれも、ぼくにお手紙なんかくれたことがないんだ。」という告白を受け、がま君とかえる君は、二人とも悲しい気分で玄関の前に腰を下ろしている場面がある。稿者は、がま君の悲しみとかえる君の悲しみについて、次のように述べている。10)

がま君は、自分宛の手紙が届かないこと＝自分自身を心配し大切に思ってくれている人が誰一人いないのではないかと、思い込んでしまっていたのではないだろうか。当初は、形式的な繋がりを求めて手紙を待っていたがま君であったのだが、手紙を待ち続けるうちに誰一人自分に手紙をくれる人がいないことが、事実として明らかになってきたのである。

つまり、がま君の願いは、自分宛の手紙をただ貰うことから、他者である誰かとの固い絆を確認したいということに次第次第に変容していったのではなからうか。がま君にとっての自分宛の手紙とは、自分自身に気遣いを示してくれる大切な存在である他者との固い絆を象徴するものであると言えよう。( 中 略 )

果たして、かえる君の悲しみは、手紙を待つがま君の悲しみに共鳴・同情・共感したからだけなのであろうか。かえる君は、今日初めてがま君に打ち明けられ、これまで自分宛のお手紙を貰ったことのないがま君の悲しみに接した。がま君は、毎日毎日、絶望と期待を繰り返しながら、今日こそお手紙が来るに違いないと萎えた自らの心を奮い立たせながら、お手紙を待つ悲しい時間を過ごしていたのである。かえる君は、これまでがま君と密接な友人関係を築いてきていたと自負していたはずである。しかしながら、それはかえる君の一方的な思い込みに過ぎなかったのである。

なぜならば、もしかえる君が、がま君の真の友人であるならば、がま君の悲しい、そして苦しい胸の内を把握し・理解してあげていたはずだからである。かえる君は、がま君の深い悲しみを理解できていなかった「自分自身の不甲斐なさ」に落胆し、「悲しい気分で」がま君の傍らに座り込んでいたのではなからうか。かえる君の「悲しい気分」とは、自分自身にとって最も大切な友人であるがま君が、日々、お手紙を待つ辛く悲しい時間を過ごしながら、毎回期待を裏切られて悲嘆に暮れていた寂寞たる姿に気付かなかったのか、という自責の念に駆られていた時間であったのではないかと考えるのである。

かえる君は、がま君の告白を受け、二人とも悲しい気分で玄関に腰を下ろしていた。この場面における作品本文「すると、かえるくんが言いました。」という文章表現に着目したい。すなわち、この「すると」に至るまでのかえる君の「時間」に光を当てたい。

かえる君は、がま君の深い悲しみを理解できなかった「自分自身の不甲斐なさ」に落胆し、「悲しい気分で」がま君の傍らに座り込んでいたのである。自分自身にとって最も大切な友人であるがま君が、手紙を待つ辛く悲しい時間を過ごしながら毎回期待を裏切られて悲嘆に暮れ

ていた寂寞たる姿に、何故気付けなかったのか、という「自責の念に駆られた自省の時間」こそが、かえる君の手紙本文の基底に存するものであると考えるのである。

#### IV. 手紙を待ち続けた四日間

##### (1) 手元のない「手紙」

手紙を託したかたつむり君の到着を待ち続けた四日間は、がま君とかえる君にとってどのような時間であったのであろうか。跡上史郎は、がま君とかえる君にとっての手紙について、次のように述べている。11)

かえるくんがお手がみを出したことを言った時点で「ない」状態は「ふしあわせ」から「しあわせ」に転換したのであるが、もっと言うならば、がまくん、かえるくんは、この時点でお手がみを手にしてしまうよりも「もっとしあわせ」だったのである。あるいは、お手がみを手にするのは「別種のしあわせ」を味わっているのである。(中略) この事例は、「ない」をめぐって想像することは楽しいのだということを教えている。このおはなしの本当のテーマは「ない」ことをめぐる「想像力」なのだと言うことができる。

ここで跡上は、「ない」状態、つまり手紙が実際に二人の手元に届いていない状態であるにも関わらず、がま君とかえる君の心情は、作品の前半部分と後半部分で「ふしあわせ」から「しあわせ」へと変化していると述べている。二人の元には、どちらの場面でも手紙は到着していない。

このがま君の心の変容は、これまで一度も貰ったことのない手紙が自分の元に届くことへの期待だけでなく、かえる君が自分のために手紙を書いてくれたことや手紙の内容を知ったことで、頑なだったがま君の心に変化が生じたためではないかと考える。がま君は、かえる君が自分の悲しみについて、親身になって耳を傾けてくれている姿を見てきた。またがま君は、時にはかえる君の行動の意図が理解できず、訝しがってしまったりもしたが、全て自分のことを慮ってのかえる君の行動であったことに、はたと気付くのである。そして、これまでのかえる君の一切の言行に合点がいくのである。

がま君は、手紙の到着を待ち続ける四日の間、自分の悲しみの告白から今までのかえる君の全ての言行を振り返り、その行動の意味についてじっくりと反芻しながら、かえる君の自分に対する様々な心遣いや配慮について深く理解する時間を過ごしたと考える。がま君は、かえる君が自ら手紙を出したことを告白した場面や、自分の「手紙に何て書いたの。」という問い掛けに応じ不本意にも手紙の内容まで打ち明けてくれた場面を回想しながら、かえる君の自分に対する優しさと心配りをより一層強く実感することができた四日間であったのではなかろうか。

足立悦夫は、跡上の考えについて、次のように述べている。12)

確かに、かたつむりくんは運んでいる途中なので、いま、ふたりの前に手紙は「ない」。その意味では、虚像といえるかもしれないが、虚像ということばで、この場面をとらえきれぬだろうか。いま、ここに「ない」ということでお手紙は二人にとって実際の手紙以上の価値をもつことになった。だから、手紙を「ふたりで待つ」という「しあわせ」な二人にとって、お手紙は、虚像ということではなくて、くっきりと目の前に「ある」。(中略) くっきりと目の前に「ありつづけた」手紙を受けとったところで、物語は終わる。四日間の「ふたりで待つ」「しあわせ」が、ふたりにとって手紙のすべてであった、というのがよくわかるラストシーンである。

足立は、今二人の前に手紙は「ない」が、「虚像ということばで、この場面をとらえきれぬだ



ろうか」と、跡上の論に疑問を投げ掛けている。足立の言う「実際の手紙以上の価値」に注目し考察を進めたい。

では、「実際の手紙」との相違はどこにあるのであろうか。実際には、手紙が手元に届くことによってその手紙の差出人や内容を知ることになる。当然のことながら、手紙の差出人の心情や手紙が書かれるまでのプロセスについては、手紙の受け手側が想像する外はない。それに対しここでは、手紙は手元にない。つまり、手に取り手紙を確認することはできてはいないが、手紙の差出人の心情やその手紙が書かれるまでのプロセスについては、差出人であるかえる君の行動や告白により、はっきりと思い浮かべることができている。作品中においてかえる君が、自分自身ががま君に手紙を書いたことを「だって、ぼくがきみに手紙出したんだもの。」と告げる過程、「手紙に何て書いたの。」というがま君の問い掛けに応じて手紙の内容を伝える過程ががま君が認知していることが、「実際の手紙」との相違を示す極めて重要な要素となるのである。そこには、虚像という言葉だけでは言い切れない、がま君とかえる君の二人のみぞ知る多くの過程が存在するのである。それが、「実際の手紙以上の価値」を生み出す源泉なのである。

### (2) 「長いことまっていたいました」について

ここでは、がま君とかえる君の二人が玄関に出て、一緒に手紙の到着を待ち続ける場面について考察を進めていきたい。甲斐睦郎は、この場面における二人の心情について、次のように述べている。13)

ふたりは、ずっと待ち続けている。「長いこと」は主観的な表現であって、見方を変えればほんの数分でも「長いこと」になるし、一年間でも「長くないこと」になるが、ここはかたつむりくんに頼んだお手紙を待つ時間であって、続く文では「四日」と明記されている。

( 中 略 ) 本文が「四日たって」であって、「四日もたって」でないことに注意したい。ふたりは、お手紙を待つ充実した時間をたのしんだのであって、決してこの「四日」を「長すぎる」とは思わなかったのである。

甲斐は、「『長いこと』は、主観的な表現」とし、「ふたりは、お手紙を待つ充実した時間をたのしんだのであって、決してこの『四日』を『長すぎる』とは思わなかった」と捉えている。

この「長いことまっていたいました。」という言語表現は、かえる君の手紙が、いつ到着するか判然としないという時間の経過を表しているのである。そして、手紙の配達を依頼したかたつむり君が到着して、初めて「四日たって」という期間を示す言語表現が使用されている。がま君とかえる君は、手紙が届くのに四日間もの日数を要するとは、よもや思っただけでなく、はずである。がま君とかえる君は、一時間一時間、そして一日一日、期待に胸を膨らませながら手紙の到着を今か今かと待ち続けたのである。

### (3) 四日後の喜び

がま君とかえる君は、四日という日数を経てがま君の家に到着したかたつむり君から、念願の手紙を手にするようになる。作品「お手紙」では、この場面について、次のように記されている。14)

長いことまっていたいました。

四日たって、かたつむりくんが、がまくんのうちにつきました。そして、かえるくんからの手紙をがまくんにわたしました。

手紙をもらって、がまくんはとてもよろこびました。

斉藤美加は、かたつむり君から手紙を受け取った時のがま君の気持ちについて、次のように

述べている。15)

その幸せは、配達をカタツムリに頼んだために四日間に渡って継続されます。この遅れは読み手にとっては笑いを誘う要素ですが、がまくんとかえるくんにとっては、クライマックスとも言うべき待ち時間の幸福を引き延ばすために欠かせない筋書きと言えるでしょう。結果として、かえるくんは最も効果的な方法で、手紙という行為をがまくんに届けたこととなります。こうして話は「てがみをもらって、がまくんはとてもよろこびました。」と終わります。この「よろこぶ」は、原文では「満足する」の意を含んだ *pleased* という語が使われています。来ることも文面も分かっている手紙を、二人でいっしょに待っていた四日間の「幸せ」(*feeling happy together*) に較べれば、届いたときの思いは、幸福感というより確認による満足感、いわば付随的なものと読めます。

斉藤は、がま君とかえる君にとって、「来ることも文面も分かっている手紙を、二人でいっしょに待っていた四日間の「幸せ」(*feeling happy together*) に較べれば、届いたときの思いは、幸福感というより確認による満足感、いわば付随的なもの」であると読み取っている。

作品本文では、かたつむり君から「手紙をもらって、がまくんはとてもよろこびました。」と記されている。この「がまくんはとてもよろこびました。」という文章表現に着目したい。単に「がまくんはよろこびました。」ではなく、「がまくんはとてもよろこびました。」と記述されており、がま君の喜びに力点を置いた言語表現が成されているのである。ここに、かえる君からの手紙を現実手にした際のがま君の大きな喜びを窺い知ることができよう。

がま君とかえる君の二人は、いつ届くか判然としない手紙を玄関の前に座って待ち続けてきた。がま君が喜びは、四日間という長い時間自分と共に手紙を待ち続けてくれるかえる君の存在を認識し互いに確認し合えたこと、そのかえる君から自分宛の手紙が実際に届いたという事実に対してなのではなかろうか。がま君とかえる君の四日間の幸せは、二人が手紙の到着を待つ時間を共有し、互いに支え合える「真の親友」として認識し合えたことに起因していると言える。手紙の到着を今か今かと待ち続けながら一日一日を共に過ごしてきた二人にとって、やっとの思いで届けられた手紙を一緒に手にした時の思いは、最上の喜びであったと考える。

西郷竹彦は、実際に手紙を手にするがま君の心情について、次のように述べている。16)

ふたりとも四日間も待っているということ自体は、世間の常識からいえばやらないことです。だからこれも笑いの対象となります。笑いの対象となるのだけれども、がまくんにとっては、それほどかえるくんから来る手紙は重い意味をもっているのです。だからそうやって待っているわけです。待って、実際に手にした時に<とてもよろこびました>というのは、がまくんにとっては、手紙のもつ友情の証という意味の重さがあるからです。それからかえるくんにとっては、がまくんが喜ぶその喜びをともにしたいということが訪ねてきたことの意味です。

西郷は、二人が「四日間も待っているということ」は、「がまくんにとっては、それほどかえるくんから来る手紙は重い意味をもっている」とし、さらに「待って、実際に手にした時に<とてもよろこびました>というのは、がまくんにとっては、手紙のもつ友情の証という意味の重さがある」と把握している。

また吉田勉は、かえる君からの手紙を受け取ったがま君の喜びについて、次のように述べている。17)

手紙は、「だれから」「どんな内容」が伝えられているかが分かれば役目を果たしたことに

なります。この作品での手紙はどうでしょう。がまくんがかえるくんからの手紙を受けとる前に「だれから」も「どんな内容」かも、がまくんには分かっています。かたつむりくんが届けてくれる〈おてがみ〉は実質的には役目を担っていないことになります。ところが、この作品の最後の文は〈てがみをもらって、がまくんはとてもよろこびました。〉なのです。がまくんがよろこんだのは、何だったのでしょうか。

手紙の果たす役目（はたらき）という条件からみていくと、最終文のがまくんのよろこびの内容が深められます。ものとしての手紙を受けとったがまくんの喜びではありません。手紙を出すという行為、その内容に込められる思い、さらにその手紙を届ける行為などをトータルにとらえながら、手紙のもつ意味を考えさせたいものです。

ここで吉田は、「がまくんがかえるくんからの手紙を受けとる前に「だれから」も「どんな内容」かも、がまくんには分かっています。かたつむりくんが届けてくれる〈おてがみ〉は実質的には役目を担っていないことになります。ところが、この作品の最後の文は〈てがみをもらって、がまくんはとてもよろこびました。〉なのです。がまくんがよろこんだのは、何だったのでしょうか。」と問いを投げ掛けている。続けて吉田は、がま君の喜びについて、「ものとしての手紙を受けとったがまくんの喜びではありません。手紙を出すという行為、その内容に込められる思い、さらにその手紙を届ける行為などをトータルにとらえながら、手紙のもつ意味を考えさせたい」と提案している。

がま君の家には郵便受けがあるのも拘わらず、がま君はかたつむり君から直に手紙を受け取っている。がま君とかえる君は、玄関の前に座り手紙の到着を待っていたはずである。がま君とかえる君が、かたつむり君の姿を認めるなり立ち上がり、急ぎかたつむり君の元へ駆け寄り、かたつむり君から手渡しで手紙を受け取る二人の姿を認めることができよう。

かたつむり君は、「おねがいで、この手紙をがまくんの家へもって行って、ゆうびんうけに入れてきてくれないかい。」という依頼を、かえる君から相対で受託している。しかしながら、作品本文においてかたつむり君は、「かえるくんからの手紙をがまくんにわたし」ている。つまり、かたつむり君は、かえる君から預かった手紙を依頼された郵便受けではなく、直接がま君に手渡している点に留意したい。がま君が、かたつむり君の姿を認め、かたつむり君の元へ歩を進めるという行為からは、かえる君からの自分宛の手紙をいち早く、自分自身の手でしっかりと受け取りたいという、がま君の手紙に対する強い思いを看取することができる。

作品の最後の場面においてがま君は、かたつむり君から直接手紙を受け取り、「とてもよろこんでいる。がま君は今、待望の自分宛の手紙を手にしたのである。そこには、自分宛の手紙を初めて受け取ったがま君の感動もある。この手紙は、かたつむり君という第三者を通してがま君の家に届けられた正式なものである。その手紙には、自分の悲しみに共に寄り添い、そしてその悲しみを共に受け止めた上で、自分の心に安らぎと幸せを齎してくれた、親友であるかえる君の温かい思いが詰まっているのである。

がま君は、「だって、ぼくがきみに手紙出したんだもの。」というかえる君の告白と「手紙に何て書いたの。」というかえる君への自らの問いによって、かえる君から自分宛の手紙が到着することと共に、かえる君から自分に届く手紙の内容まで、既に知り得ている。がま君とかえる君の二人が長いこと待ち続けた四日間という時間は、悲しい時や苦しい時、互いに寄り添い支え合うことのできる「真の親友」として、お互いを認識し合えた時間であったのである。つまり、がま君とかえる君の二人が玄関に出て手紙の到着を待ち続けた四日間の存在こそが、親友

としての二人の絆を固く結ばせたのである。二人にとってお互いを深く理解し信頼し合える相手に出会えることは、人生において最も重要なことである。がま君とかえる君の過ごした四日間は、二人の紐帯をより一層強めた時間であったと言えよう。

がま君は、いつも傍らで自分を支え、自分のことを大切に思い、自分に心を砕いてくれるかえる君という「真の親友の存在」を認識し、かえる君からの大切なそして最上の手紙をしっかりと手にしながら、大きな満足と喜びを実感しているのである。

### 【引用文献】

- 1) 『わたしたちの小学国語 2上』、日本書籍株式会社、1996年1月25日、33～35頁
- 2) 大塚浩稿「アーノルド・ローベル国語教材研究論—「お手紙」の考察を中心に—」、『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第51号、2019年12月、12頁
- 3) 前掲1)の文献、35頁
- 4) 作間慎一稿「文学作品の理解枠組みと読みの再構成」、「論叢大学」通巻42、玉川大学、2002年3月15日、37頁
- 5) 小林広美稿「生きてはたらく国語の力をのばすために：仲間と学び会い、豊かに表現する子を目指して：二年生国語『お手紙』」、『岐阜聖徳学園大学国語国文学』、2003年3月、82頁
- 6) 宮川健郎稿「かえるくんの手紙は『素晴らしい』か—アーノルド・ローベル『お手紙』を読む—」、『日本文学』44号、日本文学協会編、1995年、60頁
- 7) 前掲1)の文献、35～36頁
- 8) 高島晴美稿「二年『お手紙』の実践」、甲斐睦郎編『語句に着目した読みの指導—小学校一・二年文学教材』、明治図書出版株式会社、1995年
- 9) 井上幸子稿「THE LETTER『おてがみ』—英文と日本文の表現の特徴—」、「実践国語研究別冊」110号、明治図書出版株式会社、1991年、294頁
- 10) 大塚浩稿「小学校国語教科書教材基礎研究—「お手紙」の考察を通して—」、『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第50号、2018年12月、9～10頁
- 11) 跡上史郎稿「『ない』ことにまつわる『ふしあわせ』と『しあわせ』—アーノルド・ローベル『お手がみ』について—」、田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力』、教育出版、59頁
- 12) 足立悦夫稿「『お手がみ』再論—教材としての魅力—」、田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力』、教育出版、2001年3月、79頁
- 13) 甲斐睦郎稿「『お手紙』の表現—キーワードに着目して—」、「実践国語研究別冊」110号、明治図書出版株式会社、1991年、163頁
- 14) 前掲1)の文献、36頁
- 15) 斉藤美加稿「アーノルド・ローベル『ふたりはともだち』の文学性」、三浦和子・川端康雄編『絵本が語りかけるもの ピーターラビットは時空を超えて』、松柏社、2004年、161頁
- 16) 西郷竹彦著『意味を問う教育—文学教材をゆたかに、深く読む—』、明治図書出版株式会社、2003年、139頁
- 17) 吉田勉稿「小学校一年（教出）おてがみ（アーノルド・ローベル/三木卓訳）」、「国語の手帳」7号、明治図書出版株式会社、1987年、62頁